

目的 今日ほとんどの人が「いかに生きていくか」を問われる時はないのではないかと。高齢化が進む社会ではその二つが高齢者のみならず、他の人々の生活のあり方に影響を与え、ひいては社会全体を「質」的に変化させていくものとみられる。そこで自らの生活の確保と相互理解をもとにして、すべての国民が健康で文化的な生活を営むための福祉教育のあり方として、その基礎となる個人の関心について知ろうとするものである。

方法 (1) 大学生を対象に高齢化社会における問題に関する記入調査を行った。  
(2) ボランティア活動における事前・事後の意識及び行動の変化について実態調査を行った。

結果 (1) 約半数の者は社会福祉に関する学習を社会科又は家庭科の学習の中で既にしている。  
(2) 社会福祉、家族福祉についてはその関心はあまり高くない。  
(3) 今後の老人の生活について望ましいあり方としては、家族との同居をあげている者が多い。  
(4) ボランティア活動への参加によって社会福祉に対する関心度は高くなり、また自己を含む身近なところでの老後問題に対する認識が高まる。  
(5) 今回のボランティア活動では初期効果は高いが、継続効果は低い傾向がみられる。